

社 倉 事 目

5

朱子(1130~1200)は南宋の儒者であり、所謂朱子学の祖として我国でもよく知られている。彼が宋朝の下層官僚として永い間様々な経験を得ていたが、これは朱子学の形成に大いに影響を与えたと思われる。しかし、我国で朱子学と云えばむしろ実際とは全くかけ離れた観念論の極致であるかの様な印象を与えられがちであるが、その研究が山崎闇斎や野中兼山らによって行われた時点では、むしろ朱子学の実践的な側面が強く意識されていた様に思われる。このケースにはその様な朱子の仕事のうち最も秀れたものと見做される「社倉事目」とが記述されている。

社倉事目の原型となった崇安縣五夫里社倉記は次の様に社倉成立当時の事情を述べている。朱子39才の夏 崇安地方を饑饉が襲った。当時縣知事だった延瑞は朱子に豪民を勧誘してその蔵米を提供させ価格を安くして難民を救済する様依頼して来た。朱子は郷里の先輩である劉侯如愚と協力し、精力的に豪民を勧誘してその蔵米を徴発し、米価を低下させて救済に当った。丁度その頃近くの副建省の浦城で暴徒の掠奪が始まり、崇安の人心が動揺し始めた。その時にすでに貯蔵米はつきてしまっていたので、途方に暮れた2人は縣に請い、府に依頼せざるを得なかった。事情を知った府県事徐嘉は即日部下に命じて米600石を溪流を溯り船で送って来た。2人は村人と共に途中の黄帝歩の近くでそれを受取り、早速饑民に分配し、辛うじて事なきを得た。そしてそのうちに浦城の暴動もそれ以上拡大することもなく治まっていた。その年の秋は幸いにも豊作であり、農民は米の償還を願い出て来た。そして取敢えず米は民家に貯蔵された。これは当時の府知事王准が、米をそのまま貯蔵しておいて後日万一凶歳が来た場合に備えさせ、関係書類だけを府に提出させたのであった。しかしこの官米をそのまま貯蔵していたのではいずれ腐敗して食べられなくなってしまう。そこで朱子は府の許可を得て毎年一度希望者にこの米を2割の利息で貸付けて運用し、いつでも又新穀が貯蔵されるようにした。また貸付の利息も小饑饉のときには1割に減じ、大饑饉には免除することとした。ところでそれまでの様に米を民家に分けて貯蔵するのでは監視も行き届かず、出納にも不便が多かった。そこで朱子は王准に代って府知事となった沈度に願い出て郷里である五夫里に社倉を造ってそこにまとめて貯蔵することにした。これには沈度も60,000銭を援助してくれた。社倉は朱子42才の5月に着工して8月に竣工し倉が三棟、亭が一つ、

このケースは慶應大学経営管理学科コース、「マネジリアル・エコノミクス」の授業に使用するために作成された。

35